

1 序

1910年台初頭の頃のラッセルは「多重関係理論」と呼ばれる判断論を核とした哲学を構想していた⁽¹⁾。しかしこの判断論は、当時自分の学生であったヴィトゲンシュタインから批判されたことが大きな原因となり、ラッセル自身によって捨て去られることになった。この事件のしばらく後に発表されたラムジーの論文「事実と命題」(Ramsey 1927)は、この判断の多重関係理論を復活させる試みであった。多少具体的に述べると、ラッセルは判断とは主体、個物、普遍の間に成立する多重関係であるとしか言わなかったのだが、ラムジーはこの多重関係の内実を具体的に描き出そうと試みたのである。しかもその際に、多重関係理論を捨てた後のラッセルの『心の分析』(Russell 1921)に見られるプラグマティズムのアイデアを採用し、さらに、多重関係理論批判の上に成立したヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』(Wittgenstein 1922)の命題論をも取り入れるという、非常に複雑な構造になっている。そして、さらにこの論文を決定的に難解にしているのは、多重関係理論ともプラグマティズムとも『論考』ともおそらく無縁な、むしろ矛盾するとさえ思われる、一つの真理論が提出されているという事実である。それは次の一文で与えられている。

「『シーザーが暗殺されたということは真である』はシーザーが暗殺されたということ以上のことを意味していないし、『シーザーが暗殺されたということは偽である』はシーザーが暗殺されなかったということの意味している」(Ramsey 1927: 38)。

この考え方は今日一般に真理の余剰説と呼ばれている。しかし、上述の通り「事実と命題」の主題が判断の分析にあったため、真理余剰説についてはあまり多くは語られていない。また、ラムジーは後に、真理についての一冊の本を書こうと試み、完成させることはなく早世したのだが、残されている草稿を読むと、真理整合説や有用説に対する批判はあるものの、真理対応説への好意的な言及などがあり、果たして彼が本当に真理余剰説を信じていたのか、疑問が生じる⁽²⁾。

そこで、本論文では、上の引用で示されている考えだけを額面通り受け取り、これをラムジーの「真理の余剰説」と呼ぶことにしたい。なお、この名称は一般的な呼び方に従ったままであり、「余剰」という語の通常の意味は、ここでの「真理の余剰説」ではとくに意図されていないことに注意しておいてもらいたい。ここでいうラムジーの真理の余剰説とは、我々が使っている「真である」という述語に対応した真理性質は存在しないという学説である。以下で試みたいのは、このように理解されたラムジーの真理余剰説を、真理性質の存在を主張する実質的真理論と対決させることである。そのために、本論文では二つの区別をもうける。一つは、命題の真理と信念の真理の区別である。これは、実質的真

理論が真理性質を帰属させる存在者（真理の担い手）の種類に関する区別である。簡単に言うと、命題とは物質と異なる形而上学的な存在者であり、信念とは心理的生理的な人間の状態の一種である。もう一つは、真理をめぐる存在的議論と言語的議論の区別である。これは、世界のあり方を検討する中で出てくる真理に関する議論を、我々が現に所有し使用している「真である」という述語の意味に関する議論から区別するものである。以上の二つの区別に基づいて、真理余剰説と実質的真理論の対決を行う。まず本論文の第2節では命題の真理が扱われ、存在的議論においては真理余剰説にある程度の説得力があるが、言語的議論では実質的真理論に分があることが論じられる。また、真理余剰説の改良版の一つとしてホーウィッチが提唱しているミニマリズムの真理論が取り上げられ、これが言語的議論でどの程度実質的真理論と対抗できるのかが検討される。次に第3節では信念の真理が扱われ、真理余剰説は存在的議論においてさえ命題の真理で持ち得た説得力を失うことが示され、言語的議論では命題の真理の時以上にもっともらしさを欠くことが論じられる。最後に第3節では、信念の真理に関する実質的真理論の一つとして真理有用説のバージョン（これを「サクセス真理論」と呼ぶことにする）が取り上げられ、これが信念の真理の領域で言語的議論をどのように展開するのかが概観される。また、真理余剰説に立つと考えられていたラムジーによるサクセス真理論批判が検討され、その問題点が指摘される。

註

- (1) この理論は Russell 1910 などで展開された。理論の内容については、橋本 1998 を見よ。
- (2) 草稿は現在、『真理について』（Ramsey 1991）としてまとめられて出版されている。この本の編者によると、草稿が書かれたのは1927年から1929年始めの間である（Ramsey 1991: xiii）。真理対応説への好意的言及は、「我々は『対応』という言葉を使わなかったが、我々の定義はおそらく『真理対応説』と呼ばれるだろう」（Ramsey 1991: 11）などに見られる。

文献

- Cartwright, R. 1987. “A Neglected Theory of Truth”, in his *Philosophical Essays*, Cambridge, Mass.: MIT Press, pp. 71-93.
- Horwich, P. 1994. “What is it Like to be a Deflationary Theory of Meaning?” in E. Villanueva (ed.), *Philosophical Issues 5: Truth and Rationality*, Atascadero, Calif.: Ridgeview Publishing Company, pp. 133-54.
- Horwich, P. 1998. *Truth*, 2nd edn., Oxford: Oxford University Press. (1st edn., Oxford: Basil Blackwell, 1990.)
- Ramsey, F. P. 1927. “Facts and Propositions”, *Aristotelian Society Supplementary Volume 7*, pp. 153-170. Repr. in his *Philosophical Papers*, ed. by D. H. Mellor, Cambridge: Cambridge University Press, 1990, pp. 34-51. References to the latter.
- Ramsey, F. P. 1991. *On Truth: Original Manuscript Materials (1927-1929) from Ramsey*

Collection at the University of Pittsburgh, ed. by N. Rescher and U. Majer, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Russell, B. 1904. “Meinong’s Theory of Complexes and Assumptions”, *Mind* 13, pp. 204-219; 336-354; 509-524. Repr. in his *Essays in Analysis*, ed. by D. Lackey, London: George Allen and Unwin, 1973, pp. 21-76. References to the latter.

Russell, B. 1910. “On the Nature of Truth and Falsehood”, in his *Philosophical Essays*, New York: Simon and Schuster.

Russell, B. 1921. *Analysis of Mind*, London: George Allen and Unwin.

Wittgenstein, L. 1922. *Tractatus Logico-Philosophicus*, London: Routledge and Kegan Paul.

橋本康二、1997、「ラッセルの最初の真理論」、『哲学論叢』24号、64-75頁。

橋本康二、1998、「存在論的転回と多重関係理論 ——中期ラッセル哲学の研究（一）——」、『哲学・思想論集』24号、53-88頁。

橋本康二、2000、「真理対応説の再検討」、『哲学・思想論集』26号、39-60頁。